

---

# 転生勇者とリア充の呪い

まふおか

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

転生勇者とリア充の呪い

### 【Nコード】

N9857X

### 【作者名】

まふおか

### 【あらすじ】

高身長、成績優秀、スポーツ万能、努力家で人望と胸板の厚い硬派ラグビー男子という順風満帆ハイスペック人生を送っている原口くんは遠い遠い昔、異世界で勇者をやっていました。最後の戦いで女難の呪いをかけられたのだけれど、記憶を引き継いだまま地球で転生して幾星霜、どうも変てこな発動条件があつて今のところは呪われていない……らしい？ 同じクラスのロリ系美少女、どエス俺様王子系親友、楽しい仲間に囲まれて学園生活を送る元勇者に忍び寄る瘴気めいた謎の気配。呪いを回避して目指せ、リア充！

※ FC2ブログ「まふおか家」にて連載中の自作小説を転載しています。

## 第1話 勇者の最期

古代都市の残骸。瓦礫の山。大地の裂け目からしゅうしゅうと漏れる瘴気。その濃い瘴気越しにぐねぐねとのたうちまわる太く赤黒い、触手の群れ。だらしなく開かれた大きな口の端から溢れる緑色の粘液。ぬらぬらとぬめる見開かれた大きな眼は充血し瞳孔が開ききって焦点が合わないのに、こちらを凝視しているのが分かる。

「災厄の源」と呼ばれる大きな怪物と、俺は対峙している。その放つ憎悪の気はこちらを圧し潰しそうなほど大きく強く、そしてその強さゆえに、因果を超えた憎悪は鮮やかで、純粹ですらある。やっとここまでたどり着いた。

今こそ、この災厄の源を断ち切り、世界に平和を……！

「いけません！」

「やめろ！ 何もそこまで」

友の叫ぶ声が切れ切れに聞こえるがもう俺は迷わない。剣を構え汚濁につっこむ。ざくつと刺さった剣をぐいぐいと押し込み、最後の力を振り絞って災厄の源の核を切り、刻み、潰す。腕や足、首に絡みつき締め上げる触手をもはや振りほどくこともせず、術を展開する。災厄の源の断末魔の叫びが撒き散らされ反射し、つぶてのよきな衝撃と化して跳ね返る中、傷だらけの俺はもくろみの成功を確信した。

「大いなる災厄よ、相討ちだ」

この世界を破滅に導く災厄の源をやっと倒した。だけど、滅することはできなかった。災厄の根がわずかでも残ればそこからまた憎

悪が、そして新たな災厄が育ってしまう。戦いで傷つきすぎた俺はどのみち生きながらえることができない。だから相討ちを選んだ。最後の術は、倒した災厄の源を根こそぎ体内に取り込む禁呪だ。道連れにされた災厄の源は今、ともに滅するさだめから何とか逃れようと俺の体内でのたうちまわっている。

最後の戦いの舞台となった古代都市の遺跡は今、静かだ。藍色の夜空は澄んでどこまでも高く、たくさんの星々が瞬いている。瘴氣がないとこんなにも風がひんやりしているのか。そして、驚いたことに空気が甘い。

人々にいつくしまれ、神々に愛された俺はこの世界を守ることができたんだな。よかった。

「逝ってはいや」

傍らにひざをつく聖女が必死になって癒しの術をぶつけてくる。時間稼ぎにしなければならないと分かっている術を行使しているのか。埃と汗ですすけていても、俺を失う恐怖に顔を歪めていても恋人は美しい。癒しの才能を持ち、冷徹なほど知略に長けた聖女。ちよつと嫉妬深くてしつこいところもあって、そういうところも大好きだった。戦いから戻った暁に、と約束していたのになわなかった。すまない。でも一度だけキミと見上げた星空がこうして戻ってきた。泣かないで。

もう手足の感覚がない。

まわりに旅の仲間や、戦いの終わりを知った各国の為政者、神殿の大神官が集まっている。

世界の災厄を断ち切る代わりに、この身に引き受けた。人々と神々の慈愛により人として限界まで拡張した能力すべてを使い災厄の源を抱きしめ、道連れにして俺は死ぬ。

道連れにしなければ俺自身が災厄の苗代となってしまふ。

残された僅かな時間で、人々はさまざまな祝福を俺に施した。

ある魔法使いは別の時空に魂の器を探しもとめた。

ある神官は魂に強靱な防護の術をかけた。

ある為政者は政の、ある吟遊詩人は音律の才を魂に刻んだ。

ある薬師は草木のことほぎを、ある学者は天地のことわりを注ぎ込んだ。

ある占い師は未来を予見し、警告を与えた。

旅の仲間ほただただ勇者である俺を惜しみ、慟哭した。

そして戦いから無事帰還した暁に結婚を、と約束していた聖女は涙をほろほろとこぼしながら「うそつき」と愛らしい唇から恨み言をこぼし、それでも「とこしえに人々に、神々に愛されますよう」と祝福してくれた。

この後、よい世の中になって人々が栄える様をこの目で見られないのは残念だ。ああ、寒い。折角晴れ晴れと清らかな星空なのに視界が朧でもうよく見えない。体内に取り込んだ災厄が暴れる。苦しい。痛い。寒い。

でも、いいんだ。俺は十分にこの世界に愛された。

満足感と、体内でのたうち暴れまわる災厄とともに俺は、死んだ。

## 第2話 元勇者は不可解な呪いとともに転生する

前世の記憶、といえいいのか。俺は別の世界で勇者をやっていたことがある。

勇者としての最後の仕事は世界の災厄を道連れに死ぬこと。勇者として生まれ愛された世界のその後を見届けることができなくなる代わりに別の時空で生きることができるが、身に引き受けた災厄がたたり、ある条件で発動する呪いも負う。

別の時空で送った短い人生。鍛錬と学習とを繰り返し、ひたすらに苦難と試練を重ね、ようやくたどり着いた最後の戦い。その後の栄光を味わうことなく終わり、次の機会にはぜひ平凡な人生を、と望んだ勇者としての記憶は薄れつつある。地球に転生して以来、すでに何度も輪廻したが、呪いについての警告はまだ覚えている。

未来を見通す確かな眼を持った占い師の御婆が与えてくれたその警告は、意味が分からないものだった。

「神々とわれらの愛し子たる勇者よ、おぬしの引き受けた世界の災厄は大きい。道連れにして無に帰してもなおおぬしを呪うであろう。

おぬしにかけられた呪いは女難じゃ。

転生した先で男であるとも限らぬから、女として生を享ければ男難かの。まあ男であつても男を、女であつても女を愛するさだめもあるうからの、とにかく恋人や連れ合いがとんでもない相手であったり、とんでもないめに遭ったりする、そういった類の呪いじゃの。

しかしおぬしが慎重に振舞えばその呪いを避けることができる。  
大事ゆえきっちり覚えておくがよいぞ。

爪の先ほどの小さな隙間、そこに細かな網目が見える。その小さな隙間と愛を語らってはならぬ。この戒めを破ればおぬしは大いなる苦しみに見舞われるであろう。

それにしてもなんじゃ、この呪いはけったいじゃの。ずいぶんこんがらがっておるようじゃ。二重……、はて、三重にかかっておるのかの？

……あ？ なんじゃ？ 時間がないとな？ 何だか、こう、もうちょっとでほどけそうな感じがするんじゃないかのう。ま、仕方ないかの。……げふんげふん。

他の世界の、しかもいつ起こるか分からぬ先々の事柄ゆえ、わたしにはその意味がまったく分からぬ。ただ、板切れに空いた小さな隙間に細かな網目があること、おぬしがこの板切れに頬を摺り寄せ網目に向かって愛の言葉をささやくと呪われること、この二つは確かなのじゃ。

この呪い、よくよく覚えておくのじゃ。そして何が何でも避けるのじゃよ。

呪われることなく、幸せに過ごすがよいぞ。」

あれ？ 未来を見通す確かな眼を持つてるはずの御婆に見切り発車的占いをされた気がするよ、俺。



それにしても、何が哀しくて板切れに頬ずりしなきゃならんのだ。「小さな隙間と愛を語らってはならぬ」というのがそもそも分からない。

呪われると、途端に「呪われた！」と自覚するものなのだ、と聞いたことがある。

ある者は呪われた途端にずっしりとのしかかる他者からは見えないう重荷を死ぬまで負い続けたという。

ある者は呪われたその瞬間に顔面に呪印が現れたという。

呪いにも色々あってただ本人が不幸なだけであればともかく、いや、それともいやだけど、他人も巻き込む類の呪いだともっとまずい。女難（男難？）の呪いであればまず間違はなく独り相撲というわけにはいかない。恋人だのパートナーだの、とにかく自分以外の人間を巻き込む。

徹底して回避すべし。

とにかく一目惚れとか雷に打たれたような大恋愛とか、そういう小さな隙間を見逃しそうになるのは避けて慎重にいこう。

今のところ人間として生を享けていて、幸いそんな珍妙かつシュールな場面に遭遇したことはない。もしかして記憶にないところでモノとして転生して小さな隙間の細かな網目とキャツキャウフフしちゃったんだろうか。想像がつかない。

強いて言うならば前々回の人生で、もしかしてこれか？ というのがあった。フェンシングのマスクだ。しかし網目は細かいけれど

「爪の先ほどの小さな隙間」ではない。そもそもフェンシングのマスクは板切れじゃない。だからといって安心できようか。いかに妖怪もモンスターも亡霊も神もない世界だとは言え、何があるか分からない。マスクの付喪神が現れて俺の心をわしづかみにする、などというフェイントをかけられるかもしれない。念のためフェンシングの最中に恋バナをしないよう用心したが、自分のもの、他人がかぶっているものに関わらずマスクに向かって愛を語ることは結局なかった。このときも呪いは発動せず、平凡ではあったが幸せに人生を全うすることができた。

転生後、男であったことも、女であったこともあった。望みどおり、身の丈にあった力と生活、ただ生命の鎖をつなぎ次の世代へとバトンを渡すためにベストを尽くす、そんな平凡な人生を数回送ってきた。戦争があり、災害があり、疾病があり、どの生にも必ず別れがあり、ただ楽しいだけの人生は一度としてなかったが地に足のついた生活はおおむね幸せだった。

この世界は一人の勇者に慈愛を傾けるのではなく、満遍なくどの人生にもチャンスがあり、そして前触れなく奪われる。幼子のまま死んだ人生もあったが、それでも俺は人としての生を重ねることにこの世界への愛着を増した。チャンスがあれば必ずそれを掴み、生かすこと、それが前世の記憶を持ったまま転生を続ける俺の、世界への返礼だ。

そして21世紀、60年以上戦争のない平和が続いている日本の首都東京で俺は高校生になった。

### 第3話 元勇者は誇り高く、そしてその分小心である

今回は恵まれた人生を送っている、と今のところ思う。

俺は原口勇。黒髪黒い瞳、日焼けして浅黒い肌をした典型的な日本人だ。身長185センチでがっちりとした体格、幼いころからラグビーで鍛え、勉強も手を抜かない。ずば抜けているとはいえないが、そこそこに身体能力知力ともに高い。ぎよろりとした大きな目、太く高い鼻、分厚い唇という野生的な外見と無口で愛想がないところから硬派で威圧的だという印象を他人に与えるらしい。ただ傲慢でないし、無口でも礼儀正しく丁寧な応対を心がけているので、老人と子どもには好かれる。今のところ恋人はいないが、まだ高校生だ。部活動に勉強に、と忙しい現在、すぐに恋人が必要だとも感じないから焦る必要もない。負け惜しみではないぞ。決して。もてるタイプではないが女子に嫌われているとも感じない。

友人には「チートレベル」などと揶揄されるが、記憶は薄れていてもチート人生経験者からするとこの程度ではチートと言えない。だから事実のまま

「努力をしているだけだ」

と返すこともあるのだが、そうすると

「ぎゃー、かっこよすぎるう」

とさらに騒がれてしまい、今ひとつよろしくない。

実は面倒くさがりな性格で機械と押しに弱いのは秘密だ。

機械音痴は重症で、計算機でさえ気がつくとうんともすんとも言わなくなってしまう。いまどきパソコンやらインターネットやらを

使わない高校生は少数派であるが、存在しないわけではない。しかしこれを放置すると現代社会では相当に困る事態に陥る。だからかなりがんばった。例えばマウスを握りつぶさずに操作する力加減についてメモするのにノート3分の1を消費したり、とパソコンを壊さずに使えるようになるのにずいぶん苦労したものだ。ワープロソフトと表計算、メーラー、インターネットブラウザと一通り使える程度には習得したので、現在はできるだけ関わらないようにしている。

神々の慈愛が極端に偏らないこの世界において、俺はやはり幸運なのだと思う。両親との関係も良好だ。

「勇、学校のお友達はみんな携帯電話を持ってるんじゃないの？」

母親からおねだりプレッシャーをかけられた。

母親というものは大なり小なりそうなのだが、この人生における母親は特に俺を甘やかしたがる傾向がある。ママ友なる、一度踏み入れると足を洗うのに苦労するとか言うネットワークにおいて聞かされる愚痴のひとつに「子どもから携帯電話をねだられて困る」というのがあるんだそう。愚痴なんだから望ましくない事態なんだろうに。身長185センチを超えてもお成長し続ける巨体をよじりつつ

「だって、友達はみんな持ってるんだもん！」

とか何とかごねておねだりする息子の姿を見たいんだろうか。うちの母親は変わっている。

「勇はよく頑張ってるからな、父さんも母さんに賛成だぞ。それに

お前なら使い方を間違えたりしないだろう」

父親も甘やかしたいらしい。ただ、闇雲に息子を信じているように見せかけて予めハードルを高めに設定するあたり、母親よりクレバーだ。父親は大手メーカーで中間管理職に従事している。これも人心掌握術のひとつなのだな。なるほど。シーンを変えても応用できる、汎用性の高いワザだ。覚えておかねば。

それにしても、困った。携帯電話か。

携帯電話といえば機械。それも精密機械ではないか。気軽に触れると確実に壊す。3年に1度程度の頻度であれば買い替えタイミングと言い訳できなくもないが、下手をすると機械音痴という恥ずかしい短所がばれてしまう。家族や友人の大事にしているものをめきよつと潰してはたまらないので他人の携帯電話であっても触ったことがない。家族や友人などが使っている姿を見るに、これは携帯するだけで触らなきゃいいんじゃないか、と樂觀視できるタイプのツールであるとも思えない。持たされたら最後、電話やらメールやら、と1日に何度も触ることになるんじゃないか。困る。仮面ライダーの変身ベルトのボタンを押し損ねてひねりつぶし、ニン☆ンドーDのソフトであるチップを割り、液晶画面にひびを入れ……そのたびにしょんぼりと肩を落とす俺の姿を見ている、この人生において最も付き合いの長い両親には

「もしかしてこの子、ちょっと残念な感じで機械が苦手なんじゃ」

と疑われる程度に露見しているような気がする。

父親から

「人には得手不得手というものがある。無理に不得手なところをど

うこうしようと思わなくても得意なところを伸ばせばいいんだよ。  
だから父さんは英語が必要なときは通訳を頼むんだ」

とかなんとか言われた。

なんだか父親自身の言い訳成分含有率が高かったような気がする  
が俺は慰められたんだろう。

ちなみに俺の場合コミュニケーションスキルも割りと高いし、地道な努力の積み重ねでどうにかなるジャンルである外国語はわりと得意だ。

それはともかく、携帯電話。中学生のころから使ってきた伝家の宝刀的言い訳、

「まだ俺には早いよ。連絡は公衆電話で済むからなー。いつかは使うようになるんだし、今じゃなくてもいいと思う」

で今回もしのぐか。

そう思ったのだが、そうもいかなかった。

先日、顧問に呼び出された。クラブの中でも携帯電話を持たない部員は俺だけらしい。急場の連絡に困るんだよね、と顧問から世間話の体でやんわりと携帯電話を持つよう要求された。……普通、携帯電話は校則で不要なモノ扱いにして規制しましょうねー、とかなんとかなるんじゃないのか？ 顧問、あなたもなのか？ みんながみんな、俺に機械を与えたいのか？

携帯電話。機械音痴なのできつと壊してしまう。つるりとした冷たい物体なのに、それがまるで生まれたての仔猫のように心もとなく脆い存在に思える。操作を覚えられるかどうか以前に握り方やボタンの押し方の力加減に不安を感じる。今回もノートにメモしまくって壊さない使い方をマスターするしかないのだろうか。なんと面倒な。

こうしてきれいに外堀を埋められた俺は生まれて初めて携帯電話を手に入れた。機械音痴という恥ずかしい欠点を隠しながら克服すべく、当面は家族と部活動関係者のみ、通話も電子メールも主に受信、インターネットはほぼ不使用、と機械そのものの接点を減らすことにした。弄り倒してすぐに壊してしまうのでは、いずれ機械音痴がばれてしまう。

元勇者というのは誇り高く、そしてその分だけ小心なのだ。

閑話 魂の半身よ、呪われるがよい

秋。夜。

不夜城などと称される歓楽街であればともかく、東京であっても郊外では天候や月の巡りによって星が瞬く夜もある。

元聖女は立ち止まり、空を見上げた。

——あのときの、あの星空とは似ても似つかない。

それでも。昼間の疼くような喧騒が鳴りを潜めた空気の、そのひんやりとした肌触りは、あの勇者を失った夜を元聖女に想起させる。

勇者の体がひととき大きく跳ね、苦悶の表情を泣き笑いのようにゆがめたその瞬間、彼に死が訪れた。

骸を囲んで人々はがっくりと肩を落とし、しばらく後に、誰からともなくすすり泣き始めた。

恋人の頬を撫でようと腕を伸ばした聖女はびくり、と戦き、動きを止めた。



みし、みし、みしり、みし、みし：

勇者の骸から不穏な音が響く。聖女が息を飲むのが早かったかどうか。ごぼり、と勇者の口を内から押し開け、瘴気とともに赤黒い触手が溢れ出した。

「退がりなさい！」

人々がその汚濁に気づくより早く、聖女は触手をつかみ、ずるずるずると骸から引きずり出した。大蛇のようなそれを腕に巻きつけ膝で抑えこむ。

災厄の残滓だ。勇者を犠牲にしてもなお、災厄は甦り世界を憎む。

「聖女様！」「浄化の結界を早く！」「聖女様をお救いせねば！」  
それぞれに得物を手に駆けつけようとしたそのとき、聖女がそれを拒んだ。

「来てはなりませんッ！」

災厄の苗代となりかけていた勇者の骸から無理やり引きずり出された災厄の残滓は自由になろうともがき、耳を覆わんばかりに喚き、瘴気をぶすぶすと吐く。どんなときも凜然としていた聖女が美貌をゆがめ憎悪をあらわにし、獣のように唸りながら、災厄の残滓を抑えこんでいる。

占い師の御婆が立ち上がった。

「魔術の長どの。勇者の骸と聖女の周りに殲滅の陣を」

殲滅の陣。それは魔法陣の中の物質を生命の有無に関わらずすべてを粒子より細かく分解した上で、跡形もなく滅する術だ。聖女を災厄の残滓とともにその陣に閉じ込めよ、と御婆は言っているのである。

その言葉に周囲は憤ったが、御婆は耳に入らない様子で聖女に歩み寄り、尋ねた。

「聖女よ、おぬし、呪われたのじゃな」

災厄の残滓の瘴気に肌を焼かれる苦しさに顔をゆがめつつ、聖女は肯いた。

「勇者は知らなかったのです。私たちが魂の半身として結びついていたことを。だから彼は私を置いていった。でも、勇者の魂が異界へ渡り世界から完全に失われたため、魂の半身を失った私にさきほど妄執の呪いがかかりました」

魂の半身は神々の祝福。それは光、苛烈な輝きだ。神々に祝福された半身同士は二人でひとつ。本来持つ実力以上に輝かしく力をふるうことができる。どんなに離れていても強く深く結びつき、惹かれあい、求め合う。

しかしあまりに強いその絆は半身を失ったとき、暴走してしまうのである。それが妄執の呪い。

「聖女よ、おぬし、もうこの世にとどまることができぬようじゃな。おお、神々の愛し子よ、なんといたわしい」

「はい、勇者を追い、異界へ渡ります」

二人の会話を聞き、聖女の決意が翻らないことを知った人々は、魔方阵の用意や周辺の浄化、災厄の残滓の制圧、とそれぞれに可能

なことの準備へと動き始めた。

「陣の用意に今しばらくかかるようじゃ。聖女よ、異界へ渡る前によう聴け」

御婆は語り始めた。

「先ほどの勇者の呪い、おぬしのおかげでようやく理解できたわ。これはやはりおぬしの妄執の呪いと表裏をなすものであったのじゃない。

勇者は魂の半身の恩恵を受けずに異界へわたってしもうたようじやの、その分おぬしの妄執の呪いはより強くなっておる。おそらくは勇者が渡った異界へ辿りつくことは間違いないじやろうよ。そしてどの時代、どの国であっても必ず勇者と同じ時空に転生するじやろう。つまり、おぬしらは幾たび生まれ変わっても必ず出会うさだめなのじゃ。」

御婆の、歳を重ね皺に半ば埋もれた眼に揺らぎが生じた。

「なんと酷い……。」

おぬしは魂の半身である勇者と出会ってもその愛を得ることはできぬ。

勇者はおぬしを魂の半身であると見なさず、魂の半身を失ったことに気づかず、おのれの埋めようのない空虚に苛まれるのじゃ。

そしておぬしらはすぐそばですれ違い、それぞれに悲しみと虚ろを抱えたまま幾たびも生まれ変わるじやろう。」

言葉を失う聖女の動揺を感じ取ったか、災厄の残滓が腕の中でひ

ときわ激しくのたうつ。

「ただ、勇者にかかった女難の呪いが目覚めたとき、聖女よ、おぬしの妄執の呪いは解ける。

おそらく機会は一度きりじゃ。

そして、おぬしの妄執の呪いが解けても、勇者にかかった呪いにより、おぬしも女難、勇者にとっての災いのひとつとなるであろう。それでもおぬしは魂が耐え得る限り、勇者のそばでその機会をうかがうほかない。たとえおぬしが望まずとも。

なんと酷いことじゃ。災厄を絶つことがこのように祟るとは。神々とわれら人の愛し子たる二人がこのように酷いめにあうとは」

御婆は力なく項垂れた。

魔法使いたちの手により殲滅の陣が完成し、発動した。

陣を中心にあたりの空気が「ぶん……」と鈍く震える。そして勇者の骸と聖女、災厄の残滓が光り、その姿が崩れ始めた。

「あああああああッ！」

暴れまわる災厄の残滓を抑えつけながら聖女が吼え、光の柱と化していつそう激しく輝き、人々の視界を白く灼いて、爆ぜた。

聖女は勇者を追って異界へ転生した。あれからどれだけの年月が経ったのだろうか。

御婆の予言は正しかった。

元聖女はどの人生においても必ず元勇者に出会った。

その生における初めての邂逅がたとえ死の間際であろうとも必ず二人は出会った。そして元聖女は必ず魂の半身を見出し、元勇者は彼女が魂の半身であることに気づかない。

ある人生では元勇者を傍らで見守り続けても顔さえ覚えてもらえず、ある人生においては敵対した。ある人生においては勇者を殺さえた。

もうこれ以上苦しみたくないと何度願おうとも必ず愛する人のそばに転生する。その思いが報われないと分かっているも魂の半身を見出すとき、元聖女の心は抑えがたい歓喜に震える。

いつからだろうか。報われない思いに疲れ、魂の半身を見出すことが昏いよろこびと成り果てたのは。

21世紀初頭の日本、東京。転生の末、元聖女は高校生になった。すでに元聖女は魂の半身を見出していた。元勇者は同じ高校にいる。今までに比べると比較的早く出会えた。

今度こそ妄執の呪いが解けるかもしれないと、わずかな希望にする。しかし、それが女難の呪いの発動を意味し、空虚を心に抱えても穏やかな時を過ごしていた元勇者に災いをもたらすと彼女は知っている。

――分かっていて、あのひとの不幸を見たくはない。けれど、もう疲れた。

――はやく、呪われるがいい

妄執に苛まれる元聖女は、呪いの発動を待ち望んでいる。

## 第4話 元勇者、美少女に携帯電話をいじられる

都大会は二回戦で敗退し、九月のうちにあっさり三年生が引退。

まあ、受験もあるからそうでないかと困るんだが。

そういうわけで天気はよいのだけれど、三回戦に向けて組まれていたスケジュールが空いて練習は休み。ちょっとあざといかんじの金木犀の香りが漂って、もうすっかり秋だ。

携帯電話を使い始めて数ヶ月。俺の携帯電話に登録されているのは相変わらず家族と部活動のメンバーだけ。カメラもついているらしいがうかつに使って万が一の事態に陥っては大変なので封印している。壊してはならん、壊さないぞ。

放課後、携帯電話を開いて練習や試合スケジュールの連絡メールを確認していると、隣の席の女子、梅田、上野…じゃなかった、上原だったか、そんな名前の女子がおずおずと声をかけてきた。

「原口くん、そのケイタイの画面についてるぴらぴらは取っちゃっていいんじゃないかな……って、思うんだけど」

指摘されて驚いた。ぴらぴらして邪魔な皮だ、と思っていたが出荷時に画面を保護するための透明フィルムで使い始めに剥がしてしまふものなんだそうだ。知らなかった。

正直にそう言うと、上原は小首をかしげ

「そうなんだ？」

と微笑む。

うっ、かわいい。

上原はふわふわした栗色の髪、ばら色の頬と唇をもつ。華奢で小柄であるからか、高校生というより中学校に入学したばかりの年頃の少女に見える。童顔で目がぱっちり大きい。そのぱっちりした目を潤ませて俺を見上げるものだから、その、なんといえいいのか、うろたえてしまった。

何も悪いことはしてないはずなのに瞬きただけで泣かしてしまいそう、まだ泣かしてもいいのにもうやらかしちゃった気分というか同じ空間で同じ空気吸っていてすみませんというかなんというか、とにかく後ろめたい気持ち、に近い。椅子の上の尻が後ずさってしまふ。しっかりしろよ、俺の尻。

かわいい。かわいいんだけど、きらきらしすぎて、きらきらにあてられて舞い上がってしまいそうだ。

この舞い上がっちゃう感じってアレだよな、この人生においては初だけど、何だか思い当たる節あるようなないような、アレっぽいよな、そのなんていうんだ、つまるところ初恋か。いやいやいや、違うだろう、まだいいかな、なんてついこの間考えたばかりだったような気がするぞ初恋。うわわわ、ちょっとなんというかその、何度転生しても慣れないなこの尻が逃げる感じ。

何か話さなければ、とにかく何かないか、なんだその話題はないか話題。

「いやその、アレだ、俺、携帯電話苦手でなかなか慣れなくて」

あばばばばばばっ、なんで俺カミングアウトしちゃってるんだあああ！ 機械音痴は親にも秘密なのに！ たとえバレバレであっても。



「そんなうろたえるくらい苦手なの？　なんでもそつなくこなしちゃいそうなのに意外ね」

上原はくすつと笑った。うわあ、かわいい。

その愛らしさに俺は苦しくなった。

上原のふわふわすべすべの頬に西日があたる。明るい色の髪に光が透けて淡く輝く。一片のくすみもかげりもないミルク色の肌。それなのに目元にぽつり、とひとつだけほくろがある。目を細めるときに頬に落ちる長いまつげの影のかたちが、遠い遠い昔、どんなにあがいても辿りつけない場所に置いてきたいといい人と少しだけ似ている。

何をしてても埋まらない空虚が俺の心にあるのはずいぶん前から自覚している。どんなに姿かたちが似ている人であっても、結局代わりにならないことも知っている。この人生においてまだ恋を知らない若者であっても、俺はもう何度も生まれ変わり空虚を抱き続ける擦れた魂の持ち主だ。

同じことを繰り返すくらいなら。

苦しさをやり過ごそうと目を閉じた俺の手から上原が携帯電話を取り上げた。

「林檎電話じゃない。おそろいね」

彼女の携帯電話とならべてみる。確かに大きさや形状、ボタンなどは共通しているようだがどうもあれだな、同じと言いつ切るには上原のものはずいぶんカラフルだ。しかし俺より明らかに携帯電話世界に通じていそうな彼女がそう言い切るのなら同じ林檎電話とやらなんだろう。

なにやら弄っていた上原が

「はい、パスワード入力して」

と俺の携帯電話を返してきた。画面を見ると、確かに林檎パスワードを要求されている。よく分らんが言われるままにパスワードを入力した。その間、上原は目を細めてまぶしそうに窓の外を見ている。

「入力した」

と携帯電話を上原に渡すと、なにやらまた操作している。

「電話番号と名前を入力して」

また戻された。あああああわあわ、言われたとおり慣れない作業に勤しんでいると

「ほんとに、苦手そうだね」

上原がにこにこしながらこちらをじっと見ていた。焦りながら何とか入力してまた上原に渡すと、ちょこちょこまた弄った。そして俺の肩をつんつん、とつつき

「はい、林檎電話持って」

と朗らかに言う。言われるままに携帯電話を握る。

「はい、ごっちーん！」

電話を握るお互いの手をぶつけた。

「ぶるるん」

と振動を模した気が抜けるような電子音が飛び込んできた。

おおう?! 俺の携帯電話の画面に何かのメッセージウインドウが出現している! エラーか? 故障なのか? 3年は使おうと固く誓ったのにもう壊しちゃったのか、俺?!

あわあわとうろたえる俺の手から上原は携帯電話を取り上げ、ちよちよこ、と操作した。

「バンプだよ」

戻ってきた携帯電話を見ると、上原はるか、と新たに電話番号とメールアドレスが登録されている。

「ね、ね、見て見て」

上原が俺の注意を喚起するので差し出された彼女の携帯電話をのぞきこむと、俺の携帯電話番号とメールアドレスが登録されている。説明書も読まずたかだか数分の作業でこんなことができるのか、上原。バンプなるものの仕組みはさっぱりだが神のみわざレベルの便利機能だということは理解した。

「なるほどこれはべ……」

言いかけた そのとき、意識の端にふと、何かが触れた。位置は、教室の外。俺に向かって伸びる違和感のある気配。あるいは上原に

対するものかもしれない。おずおずと遠慮がちに伸びるそれは黒く瘴気めいた渦巻きのオーラを伴っている。渦巻きに微かに悲哀の色が見えたような、なぜか懐かしいような胸を締めつけられるような追いかけようと立ち上がった俺が姿を視界に捉える前にその気配はふうっ、と絶えた。

再び自分の席に戻り座りかけた中腰の姿勢で俺はほぶっ、と水のないはずの教室で溺れそうになった。

上原近い近い顔が近いそれでそのセーラー服の襟からちらっと中が見えそうにいやその身長差が大きいからその位置角度からしてちらっと見えてしまうのは仕方な……いやいや、俺は見えてないぞぜんぜん見えてない白く光を内包したような肌が盛り上がりなだらかな谷間をかたちづく……ほぶっ、上原やめてくれその上目遣いいい。

「ね、保護シート買いに行こうよ。つきあってあげる」

お、おう、とうなずくほかない。

何なんだろうね、その保護シートってのは。全転生人生網羅しても記憶にからつきしない初体験であるところの、ロリ系美少女の魅力に屈服したかもしれない俺のガラス細工より脆い心をがちり保護してくれる何かなんだろうか。あるいは童女めいた上原に翻弄される背徳感めいた敗北感から保護してくれる何かなんだろうか。

教室にさしこむ赤い夕日に紛れていればいいのに、俺の真っ赤な顔。



## 第5話 元勇者、精神力をガリガリ削られる

保護シートってのは情弱な俺をあまりに鮮やかな刺激から守る何かではなく、携帯電話の液晶画面に傷がつかないように貼り付ける透明なフィルム状のシートのことであったよ。

あのあと、俺は上原に連れられて家電量販店に行った。保護シートなるものを買って求め、恥を忍び上原に貼ってもらった。

「まあ、手がかかること」

なんて言われたの、俺、初めてだ。泣いてもいいだろうか。上原、童顔なのにそうやってふふ、と微笑むと年齢不詳の色気が全体からもろもろ漏れ出してなんていえないんだろう、俺、いたたまれません。

その日は他に家電量販店内のデジカメやらゲーム機やらMP3プレーヤーやら、一触即発間違いなしの精密機器を山ほど見てまわり、精神力をガリガリと削られた。

今まで接点がなくあまり話したことのない上原が、こんなにも多彩な表情で楽しげにしているのを間近で見られたのは、正直なところうれしかった。女子がにこにこしているのはいいものだ。まあ、俺の精神力がガリガリ削られようがどうってことはない。

……どうってことない、はず。

「いっさむくうううん」

グラウンドに響く能天気な声。ショートスプリントの最中にやられて部員全員が一瞬、がくつ、と脱力してしまった。

新主将の平林が女子に大人気のさわやか王子顔をゆがめてキレかかっている。三年生の引退直後でチームはまだ俺たち二年生を中心にした体制が整っていない。役割分担は決まっているけれど心理面でまだ整っていない感じた。ただでさえふわふわしているのにこれはまずい。俺が、俺が何とか事を収めなければ。俺、副将だし。

「すまん、みんな、すまん」

急いでフェンス外で手を振りながらぴよんぴよん跳ねているロリ系美少女のもとへ向かう。

「上原、何か用か。そしてその呼び方は何とかならんか」

「今日ね、いっしょに帰れるかな？ って、思っ。あ、のさ、勇くん、あたしのことは上原、じゃなくてはるかって呼んでね」

だからその上目遣いやめてくれ。ぴよんぴよん跳ねるのもやめてくれ。足がいつもよりたくさん見えるのもちよつとまずい。いや、ヒトとして足の本数が増えるのがまずいという意味でなくだな、絶対領域の強制拡張が目毒だと、いやいやいや、俺は見えない見たわけではないぞ。そして呼び方に関しては華麗にスルーか。俺もスルーしてやる。

「部活終了後のアポについては同じクラスなんだし休み時間に話せると思うんだが上原」

「はるかっと呼んで。それからぜっんぜん質問の答えになってないよ、勇くん。今日はいっしょに帰れるの？ 帰れるよね？」

「今日はその、練習のあとミーティングがあつて遅」

「はるか、勇くんのこと待ってる。いいよね？」

いっしょに帰るといっても最寄り駅の少し先にある乗り換え駅まで、学校から超鈍足歩行してもせいぜい合計30分弱といったところなんだがそれってミーティング待ちする意味があるのか。

だいたいなんでこんなになついちゃったかなあ、上原。

色素が薄いはかなげな印象の小柄で華奢なロリ系美少女。天使のような童顔なのにちらりと妖艶な色気を見せる。

俺が上原の愛らしさにくらくら来てるのは事実として、現時点で俺は彼女の見た目だけに惹かれていてという自覚がある。それでいいのだろうか。上原はそんな俺に何を見出しているのか。

だから上原その上目遣い＋セーラー服の襟の隙間ちらりやめてくれ。

ほんと俺もういやだ、上原が同級生で同じ年だと分かっているけど見た目が見た目だから子どもの掌の上で踊らされているような屈辱感とそれに抗えない後ろめたさ、もう抗う必要もないんじゃないの新境地開拓しなきゃば、みたいな開き直りに一歩踏み出しそうで、もう恥ずかしくて死ねるレベルだ精神力ガリッガリに削られちゃってるから。なくなっちゃうから。

「勇、何やってんだ。次のメニュー、行くぞ」

冷え冷えとしたオーラをまとって主将の平林がやってきた。フェンス外のギャラリーから「きゃー」と小声の抑えた歓声があがった。抑えた分だけ熱気がうねりながら高まっている感じがする。平林は



ごつくて汗臭いラグビー部員の中でひととき目立つさわやか王子系の細マッチョ美形で、ギャラリーの9割を占める同年代の女子のお目当てはほぼすべてこいつだ。ちなみにギャラリーの残り1割は近所のお子ちゃまとその保護者、散歩中のお年寄りなどで構成されている。

「そのあなた、練習中に部員に声をかけないでいただきたい」

「だって」

「緊急のご用であればマネージャーか、あるいは僕に声をかけてくだされば対応します」

「……わかりました。ごめんなさい」

平林、さすがモテ男、耐性が高い。上原のあの上目遣い十胸元攻撃をもっともせずクールに威圧カウンターアタックするとは。俺は何度転生してもこのあたりはどうもダメだな。連れ立ってグラウンドの中央に戻る途中、平林が俺をちらりと見た。

「勇、顔が赤いぞ」

「すまん」

「切り替えろ」

「ああ、わかった」

平林は足を止めた。

「勇、お前はチームの要だ」

静かな口調で熱く俺を焚きつける。のせ上手でチームを俯瞰できるから平林はキャプテンシーが必要とされる主将に選ばれたのだと思う。

「フォワードは勇に任せる。試合になったらどっちにしるフルバツクの俺が最後は華麗にもらっちゃうけどな」

そして俺様キャラだ。にやり、と性悪に笑ってもびたりと決まる王子顔、こいつとならあるいはもっと高みを、と思わせる瞳のきらめきが傍にいる者の胸を熱くさせる。それだけではない。およそ1時間半の試合中、テンションを維持し続けるスタミナとノリのよさという説得力があるから親友平林のどエスナリクエストに応えたいと思ってしまうんだな。きっと。

「で、勇、俺のことはミツテル、いや、俺とお前の仲だからな、テル、と呼んでいいんだぞー」

「平林、口調が棒読みだぞ」

平林に背中をぼん、ぼん、とたたかれているところで背後のギャラリーからひそひそと「攻めよ、攻め」「いや受けもまた」とかなんとか聞こえてきたような。あれは一年生の女子グループか。攻めってオフエンスのことだよな？ オフエンスであれば主にフォワードが担当するわけだが彼女らは平林ファンだったような。平林はフォワードでなくバックスだが、ポジションをよく理解していないんだろうか。あるいは逆にものすごくラグビーに詳しい目の肥えたコアなファンで俺たちの戦術を分析評価しているんだろうか。だとしたら、悔しいことに都大会2回戦敗退の我が校をセレクトするのも不思議な話だ。それにしても受けてなんだ。いきなり飛躍してお笑い番組の話か。

ふと。フェンス外のどこからまたあの時見たどす黒い瘴気めいたオーラがゆらりとたちのぼる。オーラの渦巻きがくるり、くるりと舞う。悲哀の色はあのとときより僅かに影を潜め、違う色合いが混

ざっているように見えた。しかし、はっきり捉える前にまた気配は途絶えた。

なぜあのように意識の端をさするような現れ方をするのだろうか。あの様子だと、こちらが警戒していることも知っているにちがいない。

害意はないようにも思えるが決して安心できるような、放置していいようなものとも思えない。今回まだ二度目だが俺だけでなく、上原がいることも前回と同じだ。目当てが俺でなく上原である可能性も大いに考えられる。

練習後のミーティングを終えて部屋から出てみれば、先刻の宣言どおり上原がにこにこして待っていた。超鈍足歩行で駅まで移動する間、にゃあにゃあと遊びをねだる仔猫のようにじゃれながらうれしそうに何か話していたのだが、瘴気めいたオーラを帯びた気配のことをぼんやり考えていたため、申し訳ないことによく覚えていない。

## 第6話 元勇者は空気が甘々だと窒息する

「いっさむくうううん」

盛大にハートマークが飛びそうな甘ったるい声がかかる。上原だ。「いっさむくうううん」というのは勇くん、すなわち俺のことだ。一人息子に激甘な母親でさえここまで砂糖をしこたま投入した呼び方はしないので誰のことかぱっと分からなかったじゃないか。ほんとのところ、分かりたくないだけだな。

たかだか携帯電話ひとつをきっかけに女子の友人ができたというだけのことなのに、なんだか遠くへ来てしまったような気がする。人望胸板ともに厚く無口な威圧系タフガイとして鳴らしていたはずの俺が、今では部のごつくてむさい後輩たちから「いさむくん先輩」と呼ばれるなんて。もしかして俺、今、ものすごく残念な感じだったりするだろうか。

「ね、勇くん、帰ろ」

今日も練習を終えて部室棟の外へ出ると上原が待っていた。そして最寄り駅、そして乗換駅までの数十分を二人で過ごす。たかだか数日のことなのだけど、もう小柄な上原の超鈍足にあわせてゆっくり歩くのに慣れてきている。

人は変化になれるのが早いものなのかもしれない。  
そういえば1ヶ月前はまだ夏だった。だらだらと残暑が続いてい

たのがはるか昔のことのようだ。もう秋だ。たかだか数日。この間に日が暮れるのが早くなり、街灯と街灯の間のわずかな闇に上原の白い頬の輪郭が、明るい声が空に溶ける。

どんなにあがいても埋めようのない心に巢食う空虚は飢えに似ている。

今までの転生人生ではよほど若くして亡くならない限り、伴侶を得ることが多かった。激しく深く愛すれば空虚が埋まると考えた頃もあった。長く傍らにあり、子が生まれればまた絆は深まる。しかし気がつくとうちのうちに巢食う空虚が重く鈍く膨張している。恋愛でもなく、家族でもなく、仕事でもなく、何をしてもその飢えに似た空虚は埋まらない。おそらく今回の人生でもそれは変わらない。

ひんやりした秋の空気。暮れなずむ淡い夕空に一番星。あの星空はこんなに優しい色ではなかった。もっと闇が濃く、星が近く……。決して手の届かない時空のかなたに胸をかきむしりたくなるほど恋しい人がいた、その記憶も溶けてしまえばいいのに。

ある夕方、練習後。

部室を出ると、ここ数日恒例となっている

「いっさむくううううん」

がない。

「いさむくん先輩、今日はお迎えなしっすか」

「もう上原先輩にふられたっスか」

うるさいな、後輩ども。妙に目をきらきらさせてるな。なんでそんなに興味津々なんだよ、おまえら。

「やかましい。ふられるも何も上原とはそういう間柄ではない」  
「強がっちゃってー、んもう、いさむくん先輩ったら、いけずううう」

とくねくねしながらむさい声を裏返しているのはスクラムハーフの渡部。こいつは一年でレギュラーになったくらいだから相当にできるヤツだ。後輩どもによるとシヨタ顔がどうかでギャラリーの人氣が高くなってきているらしい。昔はしょうゆだのソースだの、顔の彫りの深さを調味料に例えたのだとか。シヨタってなんだ。これも調味料の一種か。よく分からないが渡部はくりくりとした瞳の表情が豊かで愛嬌のある顔をしている。性格はけっこう腹黒いけど。

はて、今日は約束がなかったかな、と制服のポケットにある携帯電話を取り出そうとしたとき、部室棟の裏から男女の争う声が聞こえてきた。

―― 上原か

建物の外周を走り部室棟の裏手へ飛び出たところで

「痛い！」

上原の悲鳴が聞こえた。

全身の血が凍りつくかと思った。建物裏手の暗がりでは上原は地面に這い蹲るように倒され、あのふわふわの髪の毛を男に掴まれている

た。そして男は拳を振り上げている。

考える間もなく割って入った。

急に割り込まれた男はなんともいえないゆがんだ表情をしている。酷薄な、力で優位に立っていることへの陶醉。反面、暴力に訴えるという禁じ手に出た自分自身への驚きと嫌悪。思うようにならない相手への苛立ち。なぜここにいるのか、こんなことをしているのか、理屈に合わない衝動への戸惑い。上原への強い執着。すべてが緋い交ぜになり、元はそこそこに整っているであろう男の表情を悲痛のかたちにゆがめている。そして、俺という闖入者が何者なのか、どう対処すべきか、情報の処理が追いつかず悲痛な表情にいぶかしさが上書きされつつある。

いかん、もう少しうまく立ち回れたかもしれない。仕方ない、相手に考える隙を与えてはならない、ととっさに俺が選択した方法は「俺のカノジョに何するんですか」

狂言だった。

ひとまず上原と男を引き離すことには成功した。

上原の制服には多少皺が寄っているが、泥や砂があまりついていない。確かめたわけではないが、ざっと見た限りでは髪が乱れてはいても怪我はしていないようだ。暴力を振るわれている最中であることに間違いないがまだ初手だと判断してよい。

発言の意味を理解したらしい男の顔が怒りに紅潮し始めた。

相手の男はうちの学校の生徒ではない。年齢は高校生とうよりむしろ、大学生、20代前半あたりだろうか。入学して以降の上の学

年の生徒すべての顔と名前が一致するわけではないが、うちの学校のOBではなかうと見当をつけた。グラウンドのフェンス外であれば学校の敷地外にあたる部分もあるが、ここは部室棟裏、完全に学校の敷地内だ。不審者として処理が可能だったか。

カウンターアタックには成功したが、俺のとった策は最善とはいえない。男は細身であり筋肉質ではなく、明らかに俺より弱い。しかし、ラグビー部員として何が何でも暴力沙汰は避けなければならぬ。次善の策ともいいがたいがここは俺は無抵抗のまま男に2、3発殴らせて口を切るとか、見た目インパクトのあるケガをしてみせてお引き取り願うか。後日たるといけないから上原には悪いが証人になってもらうほかあるまい。

男と俺の間で緊張がピークに達したとき、

「なにになに」

「どうした」

どやどやとラグビー部員がやってきた。うちのラグビー部は平林や渡部を除き、俺を筆頭にでかくてごつい連中が多い。狭い部室棟裏にごついのがひしめいて、男をぐるりと包囲した。それだけで十分威圧になる。

男の目に怯えが走った。

そのとき、冷え冷えとしたオーラをまとった平林が腕組みをして

「まだやる？」

と男に声をかけた。整った優しげな顔、穏やかな声がむしろ怖い。

「う……」



「もう帰んなよ」

「……………」

「次は不審者として警察に突き出すよ」

平林がずっと指し示した先、包囲網が解けたところを抜け、男はよろめきながら走り去った。

「平林、ありがとう」

「いや、勇に手を出すつもりがなくても暴力沙汰は困るからな、間に合ってよかった」

平林は上原に何か言いたそうにしていたが、

「騒ぎにはなっていないと思うが念のため顧問に報告してくる。上原にケガがなければこのまま帰ったほうがいい。送ってやれ」

とだけ言い、去った。副将として、何より当事者としていっしょに行った方がいいような気がしないでもないが、ここは大事にしないという平林の配慮をありがたく受け取ることにした。上原の様子も気になる。

まあ、意外に平気そうだけどな。

他の連中は制服の砂埃を払ってやったり腕を取って支えてやりして、わいわい上原を囲んでいる。でかくごつい野郎どもが取り囲んでいる様子が心なしか女王に傳く下僕どもに見えなくもないんだが。

「こんなにかわいらしい上原先輩に何てことするんだ、あの男」  
「ケガはありませんか」

「やっぱ、いさむくん先輩が彼氏だと頼りになっていいっスね」

「な、男はやっぱり筋肉」

おいおい、ちょっと待て。聞き捨てならない言葉を今聞いたぞ。彼氏ってなんだ。そして上原、うふ、なんて初々しく頬染めたりすると誤解が生じたりして問題が。

「『俺のカノジョに何か?』ってかっこよかったー、いさむくん先輩!」

「さささ、かばんの砂も払っておきましたから、後はいさむくん先輩と水入らずで」

いやいやいや、そんなこと言っていないから! 似たような意味のことは言っちゃったけど、あくまで事態收拾のためのきょうげ……。

えええ? 上原も否定しろよ。「やだ、恥ずかしい」なんてもじもじしてるとほんと誤解が。えええ?

部員どもに「ひゅーひゅー!」「頼れる彼氏!」とひやかされて精神力をガリガリ削られながら学校を後にした。上原はさすがに先ほどのことがショックだったか、口数少なく、普段よりさらにゆっくりの超絶鈍足ペースで歩く。それでも時々足がもつれるので背中を支えてやると、頬を染めて上目遣いされた。時折街灯のもとを通過するほかはさして灯りのない通学路でほのかに照らされる華奢な上原は不安げで頼りない。そして夢く見える。

道々、暴力男のことを聞きたかったが、上原本人があまり語りたくなさそうにしているのを無理に問い詰めるのはばかられ、やめておいた。俺としては、暴力男が瘴気めいたオーラを帯びた気配の

主であれば、校内にやすやすと入り込んだ点からしてもすっきり納得がいくのだが。

そして何よりも、彼氏云々の狂言と誤解について話し合いたかったのだが、それを自分から切り出すのも猛烈に恥ずかしくて、結局言い出せなかった。

そうすると、ますます話すことがない。支える腕と上原の背中の接点の辺りが妙に気になったり、視線を絡めてはふっとそらしたり、の繰り返しになる。

なんというか、会話がない分、そして物理的に距離が近い分、雰囲気妙に濃密で甘ったるくて、なんといえいいのか、もういたたまれない。喉もとまでぎゅうぎゅうにわたあめ詰め込まれて窒息しそうだ。

もう流されて窒息してしまえよ、俺、という感じがまさに10代だな、と感慨深い。転生のたびに記憶をそこそこに引き継いでいるわけだが、さすがに恋愛、しかも10代の、となると人生における瞬間最高風速的な何かなので印象に残る分、却って記憶も切れ切れだったりするわけだ。

何が言いたいかというのであれば、つまるところよく覚えていないわけだ。だって仕方ないよ、人生って10代の恋愛がすべてじゃないし、逆に、たとえば青春の甘酸っぱくも痛々しい思い出だけおよそ千年分、細部までみっちりきっちり覚えてますよ、というののもどうかと思う。

それはともかく、なんだか上原に申し訳ない感じがするんだよね。

今日の件で上原の気持ち俺に向いていることが確かめられたわけ、それはとてもありがたいし、うれしい。こんなかわいい子が

俺に、とふわふわどこまでも舞い上がってしまいそうなんだけれど。転生してから今まで何度も繰り返し返したとおり、仮に上原が伴侶になった場合、魂を賭けて愛せないのではないかと思う。今までの伴侶にそのことを告げたことはない。そのときの伴侶は自身も愛つとも愛されていると信じていたはずだ。それぞれの人生で最も愛していた、そのことは事実だ。だけど、満たされない空虚を抱えてもてあますことに俺自身が疲れている。今回も空虚を抱えたまま一時ペンディングして人を愛してよいものか、俺は迷っている。

迷ったまま、結論を出せないことを、申し訳ないと思っている。

## 第7話 元勇者は急激なりア充展開についていけない

翌日、登校したら大変なことになっていた。

暴力沙汰とか謹慎とか、そういうことではない。その方面はあの事件の直後にクリアになったと顧問と平林から聞いた。そっちじゃない。

「なんだよーう、原口、水臭いなあ」

「朝の挨拶をすっ飛ばしてなんだよ、いきなり」

「そうだぞー、上原と仲いいとは思ってたけどさー、つきあってるんならそういつてくれなきゃ、なー」

「なー」

いやいやいや、キミたち待ちたまえ。どこからその話を。

「なんだよ、原口、違うのか」

級友がげしげし肘鉄しながら問いかけたのと同時に、上原が教室に入ってきた。

「なーなー、違うのー？ ガセだった？」

違うと言っているんだろうか。まだ気持ちが固まっていない、と。そう口にしてしまえば、今日もぴかぴかきらきらに愛らしい上原の表情は曇ってしまうんだろうか。悲しませてしまうんだろうか。そ

の場に上原がいよいよと言ええることは変わらないはずだが、彼女を前にすると言葉を失ってしまう。

「お、上原、おはよう」

「おはよう。そこ、いいかしら？」

にこにこしながら自分の席から級友をどかして上原が着席する。

「原口がはつきりしないんだけどさー、上原、どうなのよ。お前たちがつきあってるらしいって今朝からその話で持ちきりなんだけど」

ちらり、と俺を一瞥したときの目が笑っていないように見えたのは気のせいか。すまん、はつきりなくてすまん、上原。俺は申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

上原はふふふ、ときらきらぴかぴかのキュートな笑顔でかわした。彼女の会心の一撃を喰らった級友はぼおとしばし見蕩れ、

「原口、この果報者がああああ」

と俺に八つ当たりした。げしげしげし、と刺さる肘鉄が痛い。

お前らつきあってるのか、という問いが、上原のふふふ、を経てどうして俺が果報者になるのか理解できない。先走りすぎだ。目の前の級友だけでなく、クラス全体が上原と俺の動向に注目しているのを感じる。そして上原と俺のカップル化は既成事実となっているらしい、そのことも感じた。

上原はふふふ、のあと、前の席から俺を振り返ることなく、そのまま始業の時刻を迎えた。

英語だったり数学だったり、体育だったり、習熟度やら男女別やらで場所が別々だったり、昼休みも委員会の会合でとられたり、と上原と話す機会をもてないまま、その日は過ぎていった。

外堀だけが埋まって、見切り発車的に交際がスタートしているような、していないような。放置していいんだろうか。

そして放課後。すれちがい、話せないままとなったので上原にメールを送った。

——いろいろと話したいことがあるけど、部活で遅くなる。待ち合わせはなしにしよう。

昨日のようなことがまた起こらないとも限らない。

上原は明るいうちに帰ったほうがいいと思う。

上原からの返信を待たずに携帯電話の電源を切り、部室へ向かった。なんだか問題を先送りしているようで後ろめたい。

部活動前にすでにぐったり疲労しているがそういつてもいられない。

三々五々と集まってきた部員たちは俺の様子を遠巻きにしていたが、練習が始まると集中し始めたようだ。

俺は練習に集中できなかった。

気持ちと体がばらばらになったようだ。いつもより認識できる範囲が半分以下に縮まったみたいで、その範囲外にもやがかかったように感じる。寝起きのようなぼんやりとした感覚は結局最後まで残

ったままだった。

練習直後。着替えに戻ろうとしてフェンス外に漂うあの瘴気めいたオーラを帯びた気配に気づいた。

また、あの暴力男か。

立ち止まり、フェンス外のギャラリーを確認する。1年生や2年生女子数人のグループが3つ、孫を連れた近所の老爺、帰宅途中に足を止めた他校の女生徒や買い物袋を提げた女性。小学生。平林をはじめとするうちの部員たちの威圧が効いたらしく、昨日の暴力男の姿はない。

それにしてもこの気配は何だ。最初は教室の外、次はグラウンド脇。そして今。上原の姿はない。

この探るような気配の主は暴力男ではないということか。そしてターゲットは俺。

練習が終わったのを察してギャラリーが散ってゆく。例の気配はいつの間にかまた途絶えていた。

何なんだろう。

俺は、あの気配が例の暴力男のものではないと確かめる前から知っていたような気がする。どす黒く渦巻いてまがまがしい様子なのに、オーラの主に害意がないと考えている。

なぜだ。

ぼんやりともやがかかった知覚外の部分に答があるような気がしてならない。

今、考えても詮無いか。



着替えようと部室へ向かう途中、部室棟裏から上原の鋭く尖った声が聞こえた。

「そんなの、分かんないよ！」

上原、帰ったんじゃないのか。そして今度は何だ？！

## 第8話 元勇者は電撃狼と鶏唐揚げの夢を見る

俺は機械にとことん弱い。

そんな俺でも人間関係を円滑にするためにゲームに手を出すこともある。ちよろつとやってみた中に某ポータブルゲーム機の人気作、怪物狩人ってのがある。プレイヤーが狩人に扮しいろんな怪物を狩って生計を立てるという筋立てだ。操作が難しく、気を抜くとゲーム機をぺきっと割ってしまいそうで半べそかいたが、慣れれば相当に楽しいんだろうな、と思ったものだ。結局うまく操作できなかったけど。一時期、装備がどうの、パーティがどうの、とラグビーそっちのけで部員どもが怪物狩人づいていたこともあったっけか。かくいう俺も「一人はみんなのために、みんなは俺のために」とかなんとか訳の分からないことを抜かす平林に付き合ってしばらく狩人をしてみたわけだが。

その怪物狩人の中に、噛み合わせが悪いんじゃないかと心配になるくらい立派な牙を持った狼に似た怪物が出てきた。でも怖いのは牙じゃなくてキレ癖だと俺は思ったね。その怪物は視界に俺たち狩人が存在するだけで腹が立つらしく、キレてばちばちと青い電撃を撒きちらかす。そのばちばちに触れば悶絶しながら痺れてしばらく動けなくなってしまう。近づくとか噛みついたり体当たりしたりと過激にじやれる上にその電撃を浴びせてくれる。

眼前で展開される光景、そんな剣呑な電撃狼を思わせる。

押っ取り刀で駆けつけてみれば、部室棟裏で睨みあっているのは上原と平林だった。

ああ、そういえば。普段あまり接点がないから忘れていたが、この二人は同じ中学の出身だったな。そのわりにすさまじくも穏やかでない雰囲気だ。

上原の顔が怒りに満ち引きつっている。

今まで見たことのない表情だ。こうして感情が剥きだしにすることもあるのか。珍しいものを見たようで俺は驚いた。普段よく目にするロリっぽくもコケティッシュな上目遣いとは違い、年齢相応に見える。

平林は真剣に怒っているようだ。

この親友にしては珍しい。ヤツは冷静なタチで怒るときもだいたいは明後日の方向から皮肉を利かせた物言いをする。人によっては「冗談きつい」程度にしか受け取らなかったりする、分かりにくい怒り方をするのだ。そんな親友がこれほど感情を露にして怒るなんて。上原、何をしたんだ。

何か二人の間でトラブルが起きて揉めているのは間違いないようだ。たとえば考えにくいが酢豚にパイナップルを入れる入れない問題に関する議論に熱中しすぎてこじれたり、とか？　ちなみに俺は入れる派の中でも「あってもいいかな」程度の消極的肯定派だ。どうでもいいか。どうでもいいのである。えい、ちくしょう、そうだよ逃避だよだってこの二人、声をかけづらい。

仲裁するべきなんだろう。いうならばボスクラス怪物並みの電撃めいた攻撃的雰囲気、誰にとってもアウェーなんだろうけど、あえて俺がここで狩人と化する必要はない、と思いたい。俺って確か千年ほど昔勇者やってたり世界を救ったりしてたよな。なんで転生してこんなにヘタレてるんだ。非チートだから？ 自分で言ってる泣いてくるぞ。そして電撃狼化してる二人は今にも「キシヤアアアアアッ！」とかなんとか叫びそうで怖い。

電撃狼云々はともかく、こういう場合、割って入るのは難しい。初めて、それを実感した。

たとい仲裁であつてもどちらの側につくのか、ある程度決めてからでないといりづらいのな。上原サイドについて「平林、何怒ってるんだよ」とやるのか、平林サイドについて「上原、何騒いでるんだ」とやるのか。俺の気持ちとしては最近急速に親しくなった上原より親友として息の合う平林の側につくのが自然といえるが……。

「どうしたのかなー」

とかなんとか、ぼけぼけしながら割って入る手もあるか。

あ、気づかれた。

これだけでもじもじ躊躇していれば当然だ。

驚いたことに電撃狼化していた二人はすっと怒りの矛を収めた。特に上原の変化は劇的だ。くると、ロリ美少女でありながら年齢不詳の色気をふりまくいっもの表情に戻った。平林はちらりと苦々

しげに上原を見やると、表情を消し無言でその場を立ち去ろうとした。

親友の平林、クラスメートでよく話すようになった上原、それぞれ俺にとって大切な存在だ。その二人が何があっても理由もへったくれもなく仲良く、とは思わないけれどこんな風に剣呑な間柄であるのはよくない。何が原因でそうなったのかははっきり分からないけれど、コケティッシュなスマイルで武装した上原は俺が何を聞いても「うふふ」でごまかしてしまいそうな気がする。

心配なのは平林だ。

たかだか一年半程度だけど、いっしょにラグビーやって、お互いに親友と認め合っていていればなんとなく分かる。平林はきつと何か言いたいのを抑えている。様子を見るとか何とか言って何かを我慢してやり過ごすつもりだ。

俺は上原を置いて平林を追いかけた。

平林は練習後の誰もいないグラウンドに戻っていた。俺が追いついたのに気づいたらしく、振り返る。眉をひそめるその表情に瞳に疲れが滲んでいるように見える。親友のその姿に胸が詰まる思いがする。平林は躊躇っていたようだが結局口を開いた。

「勇、あの女と別れろ」

ん？ 別れるってなんだ？

そもそもあの女って？ 俺の周りには女が掃いて捨てるほどいるぜ、などと粋がりたいのはやまやまだがクラスメートの女子の名前と顔が一致しなかったりするくらい縁がない。会話が成立する程度の仲となると母親と上原だけだ。上原との、何の話をしているも「うふふ」でオチがつく、アレを会話と呼ぶならば、だが。……けっこう痛々しいな、俺。

それはともかく平林の言う「あの女」は上原のことなんだろう。それはすぐ分かった。だがしかしなんで今日はみんながみんな上原と俺が付き合っているみたいに言うんだ。おかしいだろ。昨日まではそんなことなかったのに。それに昨日はトラブルはあったが、上原と俺の間で何かあったかという何もない。それどころか会話すらなかったと言っている。

まあ、それはいい。よくはないが平林が何か言いたそうにしているのに水を差してまで主張しなくてもいい。後で訂正すればいいんだし。

そう思い、腕組みして俺は口を開いた。

「平林、一応理由を聞いてもいいか」

すると平林のすっきりさわやか王子系の秀麗な顔面をいわく言いがたい表情が過った。

「いや、理由って」

「藪から棒にそういうことを言うからには理由があるんだろう。平林、説明してくれ」

「……」

いやいやいや、平林、猫のフレーメン反応じゃないんだからさ、

「ぽかーん」的な顔やめれ。そんな「こいつ何も分かってないのかよ」みたいな表情されると俺、いたたまれない。ほんと、マジで俺に何が起こってるわけ？ 上原はロリ美少女を皮をかぶった女子高生と見せかけて実はフィッシング詐欺集団のボスだったりするわけ？ 実は背中にチャックがあって開けると電撃狼が「キシヤアアアッ！」とかなんとか雄叫び上げて飛び出してくるわけ？ そんなわけないけど心の準備しといたほうがよかったりするのかな？ 言わなくても分かれよ、みたいに丸投げされると拗ねてムキになっちゃうぞ、俺。

「だから、言ってることの意味が分からないんだよ、平林」

見る見るうちに平林の顔面が怒りに紅潮し始める。

いやいやいや、待て。何？ 俺、対応間違ったのか？

「ちょっと待て、お前まさかはるかとのこと遊びだったのか」

「え、あそ……え？ 平林、そもそも俺、上原とそういう仲じゃないっていうか」

「やめてえええええ、喧嘩しないでえええええ！」

突如、フィッシング詐欺集団の頂点に君臨するボスかもしれない、チャックの内側に電撃狼を飼っているかもしれない女、改めロリ系美少女上原が乱入してきた。

「やめてえええええ」ってお前が言うか。しかも普段よりずっときらきら、むしろ目がキラキラしてるぞ、上原。この三人の状況のどこに上原をそんなに興奮させる要素があるって言うんだ。

そうつつこまれても上原困っちゃうかもしれないけど、今、俺と平林の間に決定的な認識の違いが存在することが明らかになったば

かりであって、ここはきっちり明らかにしておかないと……って、ええええええ?!

乱入してきた上原の向こう側、フェンス外にはラグビー部員やらギャラリー常連女子生徒やらがびっしりと集り、こちらの様子を凝視している。

ちょ、ちよっと、ガン見されても困……あ、もしかしてあれか？ 昼ドラ的愁嘆場鑑賞のつもりか？ 違う、違うぞ。平林と俺で愁嘆場……すっげえ嫌だそれ。断じてそんなおぞましいもんじゃないぞ、見解にちよっとした齟齬をきたしているだけだぞ。連中の興味津々オーラがあまりにも禍々しくて怖い。何気に例の瘴気めいた粘着質な気配も混じっているような気がするが、今はそれどころじゃない。

平林は表面上怒りを引っ込め、こちらの様子を見定めているようだ。

そして目をギラギラと光らせ俺の腕にしがみつくようにぶら下がる上原とうろたえる俺を冷たく見遣った平林は無言で立ち去った。

結局、目をギラギラさせた、ハイテンションな上原に引きずられるように帰路についた。メイクがどうか、かわいいと評判のカフェの裏情報とか、普段よく口にするその類の話題よりさらにわけのわからない「昨日と今日のうれしかったこと」について聞かされた。「とにかくうれしかった!」「すごかった!」の無限リフレインド話が今ひとつよく分からないがとにかく怖いくらい上機嫌だ。周囲と認識が異なるようだが上原とある程度親しいことに違いはない。その親しい上原がうれしそうにしているのは俺にとって喜ばしいことだ。



筋道だてて話してほしい、などと水を差さず俺は聞き役に徹した。特に意見や感想を求められるわけでもなかったものでそれでよかったのだろう。

平林は、ヤツは勘違いしているんだと思う。他の人間が俺をどう思ってもかまわないが、平林には事実と異なるうわさで見当違いのストレスをかけたくない。

でも、いかに鈍い俺でもさすがに分かる。上原が嫌いなわけではない。むしろ好きなんだと思う。少しずつ、二人でいることに慣れてきている。おそらくこのまま続けばそれを居心地よいと感じるようになり、その居心地のよさを手放し難くなるんだろう。きっと。

水が一滴、一滴、滴ってグラスを満たし、飽和するように。溢れ出す寸前でおそらく。たとえ先に外堀を埋められていることに引っかけりを覚えているとしても、きっと。

——平林、上原のことを「はるか」って言ってたな。

もしかして上原は平林の思い人だったのだろうか。

上原を送って連日遠回りしたわけだが、帰宅すると母親が拗ねていた。携帯電話で連絡が取れないのが不本意であるらしい。夕飯のおかず、あろうことか大好物の鶏唐揚げが大幅に減らされていた。なんてことだ。どうも拗ねた母親が俺の分の唐揚げをつまみにしてビールを大量摂取したらしい。帰ってきてくれ、俺の唐揚げ……！

母さん、俺、連日訳分からん事態にあってるんだよ。せめて唐揚げくらいがつつ食わせてくれよ。

まあ、実際には親にそんなこと言わないんだが。

その夜、俺は怒れる電撃狼に追われつつ、俺の前から逃げてゆく鶏唐揚げを取り戻すべく全力で走る夢を見た。

## 閑話 試金石（1）

試金石、ということばがある。

金の品質を鑑定するための石、という意味だ。色が黒く、緻密で石英質の鉱物が適している。合格確定の金の棒で試金石の上に線を描く。そして品質を鑑定したい金の棒で同じ石に線を描く。ふたつの描線を比べて金の純度を、OKか、NGかを鑑定する。

そして試金石ということばは本来の意味を離れ、金以外の物の価値や人の能力を図る基準となる物事を意味することがある。

平林光輝は、ひらばやし みつてる極端に偏った性格であることを自覚している。

彼が大切だと思う人物以外は どうでもいいのである。関心をもてない人物に何をして も心が痛まないし、その人物が どうなろうと、その人物から どう思われて もかまわない。

半ば本気でそう考えている。

普通はそんな危険思想の持ち主であれば嫌われる。平林自身、周囲に そんなやつがいれば、自身の性質を棚に上げて嫌うであろう。

それを理解しているからこそ、他者からどう評価されているか、平林は熟知している。

平林はラグビー部に所属している。身長が180センチ、がつがつラグビーで鍛えても決してごつごつとしないしなやかで細身の体つき、色白できめ細かい肌に切れ長の目とすっきりと通った鼻梁、薄い唇と甘く整った容貌の持ち主だ。冷静な判断力とやわらかな物腰が冷たい印象を与えるが、むしろそれが友人思いの熱い内面とのコントラストが鮮やかに浮き彫りにすると人に思わせるらしい。本人は他者に関心がないことを隠しながら生きているだけなのだが、それが彼の印象に深みを与え、他者から侮りがたい、知的だ、と高く評されることに繋がっている。

平林は、自身の美と評価を熟知し、最大限に利用している。だから、スクールカラーである明るい赤を基調としたジャージ（ユニフォーム）をまとった自分がギャラリィ女子から「薔薇の騎士」と呼ばれていることも知っている。

熟知しているからこそ、役割に徹して騎士然としたやわらかな物腰とストイックな姿勢を保つ。女子生徒だけでなく、近隣の主婦、女兒までうっとりと彼に見蕩れることを自覚している。

場合によっては自分自身の魅力を利用することさえ辞さない。

たとえば親友の原口勇に言い寄ろうと企む女子に対して、とか。

平林自身は女の子好きで、その気になればすぐ恋人候補がぞろぞろと出現する。モテるのである。しかし、女の子は面倒だ、とも平林は思う。

女の子は結局、自分自身が大好きなんであって、カレシなんてものは大好きな自分、過ぎ去ってゆく女性としての最盛期のひととき

を飾るためのツールに過ぎない、としか考えてない。

それが平林の経験則により得た実感である。

だから親友の勇には女性関係で苦勞してほしくない。はっきりと言わないが、勇には忘れられないひとがいるのではないだろうか。元カノなのか、単に片思いだったのか、それは分からない。大切にしているその誰かに心を大きく占められているのならば、無理をする必要はなからう。

平林は確かに関心のない人物に対して冷淡だ。しかし、それは反面、関心を抱く人物に対してとことん肩入れすることも意味する。彼が関心を抱き、大切に思う数少ない人物のひとりが原口勇なんである。

勇はいいヤツだ、と平林は思う。ごつくて天然ボケ風味でつつこみ甲斐があつて、でもつつこみすぎるとしよげた大型犬みたいになる。独特の愛嬌を持つが、それだけではない。

頭が良くて賢い。体を突発的事態に対応できるように鍛え、パターンをすりこんで試合に備えるのと同じように、勇は脳も鍛え抜いている。受け取る立場によっては酷に見える判断であつても必要とあらば躊躇しない。その判断に至った理由を論理的に説明できる。

高校生としては圧倒的といえる説得力をもつ。そういう賢さがある。

だからといって冷たい人間ではない。誰に対しても勇は優しい。部員からの信頼も厚いが、グラウンドのフェンス外に集まるギャラリにも少なからず勇のファンが存在する。じいさんだったり、小学生のがきんちよだったり、と年齢層が広いのには理由がある。ファンになるのは勇とちよつとでも接点を持った人物だ。勇は無口でとっつきにくい見た目をしているが、優しく言葉遣いが丁寧だ。自分の大きな体躯が怖く見えることもちゃんと知っていて、話しかけられれば必ず視点を相手に合わせて話をする。低く太い声だがゆ

ったりと丁寧に話すので、初めて話す相手もすぐに警戒を解くのだ。甘さの少ない、平林とは対照的な男性的で雄雄しい美しさをもつ勇に惹かれる女子もけっこういる。でも、誰にでも優しいということとは美点であると同時に勇の警戒心の低さをも意味する。

女の子はみんなきらきらした金の棒だ。そのきらきらが勇に向けられたとき、平林は思いの純度を測る試金石となる。

――勇を思う気持ちが本物なら、俺になびいたりしないよね？

平林にしたところで、心底意地悪い気持ちで粉をかけたりはしない。最初はたいていうまくいく。勇に惹かれていても、校内で有数のモテ男からモーシヨンをかけられれば、女の子も悪い気はしない。そしてお互いに勇に大いに関心を寄せる者同士だ。彼を眺めていることが、そして接することがいかに楽しいかについて語っていれば話題に事欠かない。ただ、そのうちになじみのある気まづさに襲われ、バランスが崩れ始める。話題の店でしか入手できないマカロンや、シヨップで見つけた手頃な値段のシュシュ、少し背伸びをしたいときにつける特別な香りのリップクリームほどには平林が意のままにならないと彼女が気づく、そのときにはすでに修復不可能な亀裂で隔てられている。

深く広くみしみしと大きくなる亀裂の対岸で女の子が遠くなり、声が届かなくなり、その姿を記憶にとどめるのが難しくなり始める。そのたびに平林は改めて思う。

女の子は面倒だ、と。



## 閑話 試金石（2）

勇にカノジヨができた。

別に勇に恋人ができることがいやなのではない。問題は菓子だの雑貨だのせいぜい単価数百円程度程度のもと同列に扱うようなエゴイスティックな少女に親友が振り回されるさまを見たくないだけだ。まともな相手ならその限りではない。そして今回に関して言えば相手がまともとは言い難い。

その相手というのが上原はるかだ。

はるかの悪癖を知る者は学校内におそらく平林しかない。

平林ははるかをよく知っている。同じ中学校から今の高校へ進学したのがはるかと自分だけだったということもあるが、それだけではない。二人は家族ぐるみの付き合いがあり、おむつが取れるかどうかのころから、物心つく前からの幼馴染である。同じマンション内で育ち長くともに過ごして家族同然となれば当然だがお互いを知り尽くしている。平林の関心のない者へ心無い態度をとる身勝手な性癖をはるかがよく理解しているのと同時に、平林もはるかの悪癖を知り尽くしているのである。

平林は木石でなし、男女の仲に疎いわけでもないので、グラウン



ド周りをうろうきやぴきやぴし始めるあたりから上原はるかの様子に気づいていた。幼馴染が目をつけるにしていはいぶんハイレベルなターゲットだと内心思っていたが、さすがに今回は試金石役を買って出る気になれなかった。

仲がよいからではない。中学時代の諍いを契機に疎遠になったからである。

家族ぐるみの交流は現在も続いていて、親兄弟を通じ近況を知ることにはできる。顔を合わせることもある。ただ、幼いころのように手をつないだり、おやつを分け合ったり、並んで花火をしたり、焼肉の取り合いをしたり、そんなことをしなくなったただけだ。双方の親は「思春期だからねえ」などと納得しているようだがそうではない。

疎遠になったのはある意味、お互いを知り尽くしているからであり、知り尽くしているくせに知らないかのように振舞ったからでもある。

上原はるかの悪癖は、男を翻弄し夢中にさせると飽きて突き放してしまうことだ。ハンターなのだろう。ターゲットをさだめ、狩るまでの手練手管を楽しむ。手に入りさえすれば満足なのだ。そして、はるかは愛らしい童女めいた無垢な外見のわりに、男を屈服させることに喜びを見出すタイプでもある。

はるかの趣味はその愛らしい外見に似つかわしく手芸だ。凝り性ののだろうか、趣味が高じて手先が器用という域を超え、コスプレ衣装を作って着こなす。小悪魔だとか言うコスプレのキャラになりきっているようすは、生来の愛らしさに危うい色気が加わりはした

けれどよく似合い、ほほえましくもあった。そしてイベントに参加するようになり、回を重ねるごとに衣装の完成度と露出度とが比例して高くなり、時を同じくしてファンだと名乗る男たちの影がちらつくようになってきた。はるか小悪魔ごっこのつもりだったのかもしれない。ただちよっかいを出したくらいのもりでも、手ひどくふられて傷ついたと感じる男の中にはいる。

中学時代、あの夏。

一般論を背負って、常識人を代表するような物言いではるか責めてしまった。あのときのことを今でも平林は苦く思い出す。

自分の口から飛び出ることばは一つ一つ、端から端まですべて正論だった。間違っていないかった。

でも、正論だから、間違っていないからと言ってだからそれが何だというのか。身勝手に醜い心根に絡めとられ縛りつけられるもの同士、お互い理解してお互いを認め合っていたはずなのに、まるでそんなことがなかったかのように知りもしない者のように詰り、反発してしまった。

その後、はるか少し大人しくなり、イベントにも参加しなくなったけれど、それは自分の忠告が受け入れられたかのように見えなくもないけれど。

——俺が上から圧しつけていいことじゃなかった。

今も視界の隅を幼馴染が通り過ぎていくたびに苦く思い出すというのにまた、と平林は眉間に皺を寄せる。

部室棟裏ではるかに対峙したあの時。

愛らしい微笑を葬り去ったはるかが冷たく鼻で嗤った。

「いきなり勇との噂が広まったようだが、発信源はお前か」

「だったら何？」

「昨日のあの暴力男はお前の恋人じゃなかったのか」

「昨日のアレを見ていたんだったら少なくとも今はそうじゃないと分かりそうなものだけど」

分かっているならわざわざ口にするな。そういうわけか。

話さなくなっただけいぶん経つのに。しぐさや表情、短いことばで多くの情報をやりとりする、久しく味わっていなかったその速度、感覚が快い。たとえ刺々しいやりとりだとしても。

「勇くんは自分のテリトリー内の人だから手を出すな、とでも言いたいわけ？」

「……いや」

「でも今まで勇くんに告りそうな子はみんな潰しちゃってたのよね？」

「俺になびく程度で勇とどうなるうというのが間違いだ」

「みっちゃん、自分を落とすすぎ」

—— みっちゃん

そう口にしたときのはるかは幼馴染として親しくしていたあの頃と同じように思え、一番近いところにいるように思えて、平林はその甘い響きに頬を緩めそうになった。しかし。

「で？ 私のみっちゃんになびくかどうか試す、というわけ？」

「……」

「ぷちっと潰しちゃう？」

俺はどうしたいんだろう、何をしたいんだろう、と、平林は途方に暮れた。はるか試金石になれない。今こうして線を描き、がりと削られ、試されているのは自分だ。

「勇はきつと……まだ準備ができてない」

「意味が分からないわ。何にしろ、私と勇くんのことを、みっちゃんが決めつけていいと思わないけど」

そうか。そうだな。平林はうつむいたままため息をついた。でも。平林は足掻く。

「勇はいいヤツだ」

「知ってる。みっちゃんと同じくらい」

平林は顔を上げた。目の前の幼馴染を睨む。そんなわけないだろう。勇と俺が、どれだけ濃密に時間をかけて親しくなったと思っているんだ。ここしばらく周りをうろうろした程度のお前に何が分かる。

「はるか、勇をつまみ食いの餌食にするな」

「……」

「あいつは確かにはるかに惹かれはじめているかもしれない。だけど、今はお前の外見に目が行ってるだけだ」

「……そのどこがいけないの？」

低い、つぶやき声だけど叫びのようだった。

「かわいい、と思ってもらうことの何がいけないの？ 最初、気に

してもらうきっかけがそれじゃ駄目なの？

確かに今までつまみ食いみたいに短いおつきあいしかできてない。でも、それって私だけが悪いの？

かわいいからあれをしちゃ駄目、かわいいんだからこうしなくちゃ駄目、

固まったイメージから抜け出てほしくない、でも、自分のためだけの特別な何かを演じてほしい、

男の人は私の見た目だけにとらわれる。

男の人はみんな同じことを言う。

縛りつけられて決めつけられたら楽しくないわ。前のパターンと同じじゃすぐに飽きちゃう。

それでも、最初はかわいいから、じゃ駄目なの？」

平林は息苦しくなった。幼馴染の、こんな虚ろな目を見たかったわけではない。

「それに、勇くんは今までの人たちとは違うかもしれない」

「違うと言い切れるのか」

「試してみなければ分からないもの。でも、今までの人と同じですぐ駄目になったら、みっちゃん、きっと私を責めるわね」

その問いに平林は答えられない。

それでも問わずにいられない。今ならまだ、勇とはるかは親しい友人の域を出ない、今なら。

「はるか、お前は気づかないのか？

勇は時々遠くを見る。求めるものが決して手に入らないような目をする」

「……」

「お前はそれでいいのか」

はっ、とはるかが顔を上げる。知っているのだ。はるかも見たのか。あのあきらめに満ちた切なげな目を。

しかし、これは言うべきでなかった。平林は後悔する。

「そんなの、分かんないよ！」

はるかの声が、表情が、痛みを訴えるようにゆがむ。建物の壁に反射して礫のように平林の体を激しく打擲する。ちようちやく

平林は知ってしまった。本当は分かっていた事実から目を背けていたことを。幼いころのようにおやつを分け合ったり、並んで花火をしたり、焼肉の取り合いをしたり、そんなことが今後決して起こらないことを。はるかが幼馴染であった時代がとうの昔に終わっていたことを。

## 第9話 元勇者、呪われる

「勇くん、かがんで」

何度も転生しているが、この歳で恋人ができるというのは早いよ  
うな、いやもう子どもがいたこともあったような、そろそろ前世の  
記憶もうっすらぼやけてきちゃったりしてな。俺です。原口勇です。

外堀が埋まって引くに引けない状態に陥れたような気がしな  
いでもないけど、もういいんです、かわいいカノジョができたんで。  
ただ部活動の後、いっしょに帰るだけというのは付き合う前から変  
わりないのだが、それでも、まあなんというか、こういうのは楽し  
いね。

楽しい。楽しいよ。でもね。これ、何？

「何って、マフラーだよ？」

上原がにこにこしている。

おつきあいというのをしてみると当然上原と話す時間は以前より  
増え、そうになると自然に彼女の個人情報に精通するようになってく  
る。平林は幼馴染なんだそうで、そりゃー心配だよ、あんな暴力  
男の件があったばかりだもんな、凄みもするよ、と深く納得した。  
彼女の趣味は手芸や裁縫なんだそう。なななな、なんて女の子  
らしい。ロリ系美少女の外見にマッチした趣味だ。受験やら何やら  
でしばらく手作りから遠ざかっていたらしく、「リハビリしたいか

ら、何か作らせて」と懇願された。いや、もう俺、嬉しくてちよつと気が遠くなった。せめて材料費だけでも提供したい、と申し出たのだが、溜め込んでいる材料があるんだとかで不要だといわれた。リハビリだから簡単なもの、と予め断られたんだがそれにしても話が出て三日。そんなすぐできるものなのか。さすがだな。

問題はそこじゃない。物思いに逃避してどうする。

かがんだ俺の首に巻きつけられたのはマフラー、には違いない。上等な毛糸なのだろう、肌触りもよく……ちよつと、一部ぬらつとした感触の糸も混ざっているようだがそれは俺が高級品に慣れていないからに違いない。その点は多少違和感があるうと無問題だ。しかしそれはともかく、編み目がすごい。これが手作りだということだから相当に気合が入っているんだと思う。複雑な模様もこもこもりもりと絡まっている。そして色。濃い赤、あるいは臙脂といえはいいのか、なんか、こう、どす黒い。

編み模様も、色も、それぞれに落ち着いた仕上がりになんだと思う。思うんだがふたつ合わせると、どうも、触手っぽいというかなんというか。勇者時代の記憶、特に最後の戦いで喰らった災厄の源の触手は強烈だったからなあ。はあああ、忘れてしまいたい。

あの触手が首をぎゅーうつと、ぎゅぎゅーうつ、と……

「もしかして、気に入らなかった？」

あー、上原さん、違うんですよ、やめて、やめてください。その上目遣いの破壊力もさることながら、今はその手をマフラーから離してください。上原と俺の身長差からいってだな、マフラーの両端を握ったまま手を下に持っていかれると首が、首が絞まりますッ！このマフラー、見た目がずいぶん触手めいてるんで洒落にならんよ。俺、また転生しそうになったよ。



優しく上原の手をとり、マフラーから強制排除することで俺は氣道を確認し、辛うじて

「いや、氣に入ったよ」

と答えることができた。まるで息乱れてません、てな感じで俺グッジョブ。

複雑な編み模様はアラン編みというそうで、フィッシャーマンズセーターなるものの編み方だそう。フィッシャーマン、つまり漁師。網とか縄とか漁グッズの模様が編みこまれているのだとか。好きこそもの上手なれ、ということばがあるがなるほど、上原は編み物が相当に上手で且つ好きなんだな。普段の構えたようなロリ系美少女の仮面が剥がれたただの年齢相応の少女に戻っている。いい感じだ。

「久しぶりだったから、ちょっと気合入りすぎちゃったかな」

「すぐく複雑な模様だもんな。ちゃんと睡眠時間とったのか？」

「もちろん。マフラーはね、セーターとかと違ってまっすぐすとーん、だから編むの難しくないんだよ」

「ほう、そんなもんか」

「勇くんに似合いそうな色と模様を考えて編んだの。楽しかった」

頬をほのかに染めながら話す様子がかわいい。でも俺に似合うもの、と熟考した結果できあがったのがこの触手マフラーなんだな。転生しても触手が似合う男、俺。でも手作りマフラーのプレゼント、嬉しい。じたばたしたくなるくらい嬉しい。決して触手に絡まれてもがいてるんじゃない、はず。

もう季節は冬だ。上原の超鈍足歩行につきあうのも少し辛くなるかと思っただけで、こうして温かいものに包まれるのなら、ゆっくり歩くのも悪くない。冬至が迫り、日の入りが早くなった。

「何か礼をしないとな」

振り向くと、上原の黒く大きな瞳に映る街灯の灯りが揺らめいていた。

冷え冷えとして暗い空。彼女の瞳で揺らめくいくつもの明かりの中に、冬になり空気が澄んできた今、都会の空でも見られる星々も映っているだろうか。それを探ってじっと見つめる。

星空は美しい。

星空は、この世界でも美しい。でも、勇者だったとき、最後に見上げた星空は格別に美しかった。

いや、一度だけ、本当に特別な星空を見たことがある。

二人並んで見上げたんだった。俺の愛する聖女、彼女が浄化の術を淀む虚空に向け放ったあのときに。「どりゃあああっ」とか何とか、ちよっと色気に欠ける声だったけど、すぐにそんなことどうでもよくなった。歴代の聖女の中でも桁違いの力を持つ彼女をもってしてもほんの少し、つかの間だったけれど、淀みにぽっかりと空い

た隙間から見えた星空は美しかった。

星っていろんな色があるんだな。それを知ったのもあのときだ。そしてあのときも聖女のこぼれそうに大きな瞳に写る星々を探してこうして見つめたんだった。

くろぐろとしたつめたい空。大気の揺らぎを映して瞬く数え切れない星々。厚く圧し掛かる瘴気を払えばすべての人々にこの美しい空を見せられる。戦いに疲れ、倦んだ俺に恋人が見せてくれた、こんな星空を。

戦いの最後、あんなことになると思わなかった頃。

忘れたい。忘れたくない。もう戻れない時空に置いてきたその人から解放されたい。でもせめてその思い出にしがみついていたい。

上原の微かな声が聞こえた。

「勇くん、私の目を見てるのに、まるで見てないみたい」  
星を映す上原の目があまりにきれいで、とか何とかもごもご弁解すると、彼女ははにかむようなしぐさを見せ、そっぽを向き

「うそつき」

とつぶやいた。

そんな気がしたが、きつと気のせいだ。俺は聞こえなかったふりをした。

誰も触れていないのに触手マフラーがひとりでにぎゅつ、と絞まった。これも気のせいに違いない。

このとき、ごまかしたりしないで本当のことを話すべきだったんだろうか。遠い遠い昔、勇者だった頃の記憶を。

前世の記憶というだけで十分怪しいのに、大昔、けっして手の届かない異世界に残した元カノが忘れられないなんて、DONオブDONっていうか、なんていうか、普通信じないだろ。そんなヤツが周りにいたら俺だって信じない。ちょっとお疲れかな、とか考えちゃいそうだし。

ここで説明を怠ったのがいけなかったんだと分かっているが、仮に何度同じ場面に遭遇したとしても

――少女の愛らしい瞳に映る明かりの揺らぎに聖女を重ねてしまう  
きっとそれは変わらない。

帰宅後、両親は一人息子が「初手作りプレゼント」をゲットしたことを大いに祝い、痛飲したらしいが未成年の俺の知ったことじゃない。母親はひとしきり触手マフラーに触れて

「絹も入ってるみたい。これはなかなか上等な手触り。相当に高価な糸を使っているんじゃないかな」

とかなんとか言っていたのがちよつと気になる。やっぱり材料費を渡したほうがいいんじゃないだろうか。

父親は凝った編み模様に感銘を受けたらしく、

「すごいな、すごいな」

「家庭的な女の子、いいねえ」

を連発してこの方面に精通しない母親（ちよつとぼかしてみた。要するに不器用）をくさらせていた。あともう少して不機嫌ゾーン突破、酒の勢いもあるから臨界点は父親の思うより低い位置にあると見た。母親から制裁されるといいと思うよ。その前に俺は中年バカップルを放置して退避するけどね。

その後、しばらくは平穏な日々が続いた。登校し、授業を受け、部活動に励み、触手マフラーで首をぐるぐる巻きにして「このマフラーを愛用してます」アピールを盛大にしつつ上原といっしょに帰る。毎日同じことの繰り返しだけれど、夢中になるような激しさはないけれど、穏やかで温かく居心地がよいようでどこか尻が逃げてしまうような、心もとなくも甘ったるい感覚は過去の転生人生でも覚えのあるもので、俺は満足していた。

そして上原も満足しているんだと思っていた。

クラスの女子に囲まれて「きっかけは何?」「なんて告白されたの?」「あんなごついのをしつけるのって大変じゃない?」と質問攻めにされていてもいつもどおりふわふわ微笑んでいたし。……最後の質問はちよつとアレだけど。俺が引っかかるんですけど。「ご

ついの」「しつける」って何？　とにかく上原は笑顔でスルーしてた。

放課後休日あらかたラグビーで埋まってる俺が提供する話題が上原にとって楽しかったり興味深かったりするはずもない。だいたいは上原の話を聞くばかりで

「うんうん」

「そうなのか」

「ほう」

「それはどうかな」

と相槌4種セットを使いまわしていたが誓って言う。何の話なのかさっぱりでも俺は楽しかった。

くるくると変わる表情。笑うたびにゆるいウェーブがふわふわする少し淡い色の髪。時間が経っても慣れない破壊力抜群の上目遣い。きゃいきゃいと笑い、くすくす微笑み、一転ぷうつとむくれて拗ね、時折切なげに俺を見詰める、そんな上原に翻弄されることさえ俺にとっては新鮮で楽しいことだった。

俺は上原が焦りを抱えているなんて、全く知らなかった。

期末試験が終わって学校全体が緩んだ雰囲気（センター試験を年明けに控えた3年生ゾーン除く）に包まれた中。練習を終え触手マフラーを装着して部室を出ると

「いっさむくうううん」

がない。

久々といえは久々なんだが、この「いっさむくうううん」がない日はよろしくないことが起きると相場が決まっている。

今度は何だ、と身構えつつ、何か用があって待ち合わせしないことにしたのかもしれない、と制服のポケットから携帯電話を取り出した。ロックを解除してメールを確認する。特に待ち合わせする予定変更に関する連絡はない。

うむ、アクシデント確定だな。問題はそれがエマージェンシーであるか否か、だ。

触手マフラーがきゅっ、ときつくなり、ぬらりとした肌触りが増した。心なしか首がちくちくする。何かよくないことの前触れでなければよいが、と焦りながら上原を探す。部室棟裏の植え込みの影にはいない。もう一度部室の前に戻るか、と踵を返そうとしてふと、グラウンド沿いに遠回りして部室前に戻ることにした。

冬場は使われていないプール横、校舎の影から女子生徒のきゃいきゃいさえざる声がある。

「えー、告られてないのってけっこう不安じゃない？」

「一度といわず二度三度、そういうのはばしっとことばにしてもらわないと、ねえ？」

この声は確かクラスメートなんだけど顔と名前とついでに声も一致しない女子たち、だったはず。この寒空の下、ガールズストークですか。

「はるかちゃんはそういうの平気だったりする？」

話題の中心は上原か。……ということはネタにされてるのは半分俺なのか?! うわ、いやだな。この名前が出てくる前に割って入るなり、「うおっほん」「げふげふ」とかなんとか、大々的に気配を撒き散らすなりすればよかった。

「うーん、今までのカレシは割りとそういうこと言うのを躊躇わない人ばかりだったんだよね」

「おおー、『今までのカレシ』！　ロリな見かけのわりに意外と大人っぽいなー」

「あー、今までのカレシは年上が多かったのもあるかな。言葉でも甘やかしてくれるっていうか」

「なんかさー、原口、甘えてるんじゃない？　告らせちゃいなよ」  
「やっぱりそうかな」

お、俺、甘えてるんだ……。もう精神力ゼロどころか大幅マイナスになるまでガリガリ削られてます。さすがに「迎えに来たよーん」などとおどけて飛び出す作戦を採用する気力もなく、俺はとぼとぼと部室前へ歩みを戻した。背後から興奮度とともに音量の上がった声が。

「今！　今、告らせちゃおうよ」

「ねねね、はるかちゃん、私も聞きたいー」

「ええ？　勇くん、言ってくるかな」

「かわいくお願いすればきっと大丈夫」

クラスメート女子諸君、丸聞こえだよ。俺、見てはいけない女子の残酷な実態を見た、というか聞いちゃったな。過去の転生人生で



女子だったこともあったんだけど、こんな感じだったかな。よく覚えていないって言うか思い出したくない。

それはともかく。

そういえば、俺と上原の交際は、暴力男の件以降、急転直下で外堀が埋まって周りから「つきあってるの?」「つきあってるんだ?」とせっつかれ、特に否定しないというかたちでなんとなく始まり、今に至る。たとえば「つつつつきあってくだしいいいッ」などと舌をかみながら告白するなどというこっ恥ずかしいセレモニーを通過せずに済んで俺は心底ほっとしていたけれど、上原は不満なんだろう。不満なんだろうなあ。俺と上原、どちらが先に好きになったかなんて意味がないと思っていたけれど、上原はあれだけの美少女なんだし、俺がちゃんと玉砕覚悟の告白とかいうのをしなければならなかったんだろうなあ。どのタイミングがよかったのか、俺にはさっぱり分らないが。

「ねねね、はるかちゃん、お願いー」

「あんたがかわいくお願いしたって意味ないでしょうが」

「えええー? そんなことないよー」

「この子は放置。あたしたち、静かにしてるからさ、言わせちゃおうよ」

「ええ? 大丈夫かな」

「だいじょぶ、いけるよー」

しーしーしー、くすくすくす、という上原たち女子の楽しげな気配を背後に俺はとぼとぼ歩く。電話かかってくるんだろうな。ここで「聞いてたぞ」なんて臍曲げてもしかたなし、腹を決めるしかない。

制服のポケットで携帯電話がぶるぶる震える。かかってきた。

グラウンドのフェンスに片手の指をかけ、もう片方の手で携帯電話を取り出す。電話は上原からだ。「応答」の表示に指を滑らせ、耳にあてる。

「はい」

「勇くん？」

フェンスの向こう、グラウンドの対角線延長上に上原たちの姿が小さく見える。そこそこに離れていてもわくわく嬉しそうな気配が視覚からはなんとなく伝わってくるが、携帯電話はその音を拾っていないようだ。ごく静かで、音だけであれば上原と俺、二人しかない感じがする。

クラスメートにそそのかされ、聞かれているにしろ、俺は上原のリクエストに応える気になっていた。ここは幸い、秘密の転生人生経験、前世の記憶がものをいう。こんなもんじゃない、羞恥プレイとしか言いようのない告白シーンなんて、いくらでもあった。しかも玉砕パターン数知れず。こんなの、もうつきあってるんだし予定調和のようなもんだ、なんてことないぞ。

でもなんでこんなに苦しいんだ。ぬらり、と襟元で触手マフラーが絞まる。ちりちりと痛みが首の皮膚を走る。息苦しい。

グラウンドの向こうで、少女たちが上原の握る携帯電話に耳を寄せている。残念なことに俺はたいそう視力が高いので向こうのクラスメート女子諸君の様子がきっちり見えている。音は伝わらないが、唇に人差し指を当てているところから、はしゃがないようお互い注意しあっているんだろう。

「……勇くん、あのね、はるかのこと、好き？」

あんなに耳をくっつけて押し合いへし合いしているのに、携帯電話を通すとまるで一対一で話しているようだ。本来の用途はそれなんだが。ここは俺もおしくら鰻頭状態の上原たちの様子は見えてないつもりで話そう。

「好きだよ」

「……じゃあ、あの……はるかのこと、愛してる？」

問いの体裁をとっているのは上原の最大限の譲歩だ。ここまで上原に言わせているんだ。俺も応えなければ。

「愛してる」

口にしたその瞬間、触手マフラーがぞわぞわと暴れだし、首に電撃のような痛みが走った。目を閉じて痛みをやり過ごす。

そして再び、一拍遅れで目を開けたそのときようやく俺は理解した。

——呪われた……！

なんだよ、これ。

空の色が、空気のおいが、何もかもが呪いフィルター越し。今までと色が違うともいえるし、そうでないともいえる。匂いが違うともいえるし、そうでないともいえる。もう呪いフィルター越し、としかいいようがない。眼前の光景はすべてが呪い色にコーティングされ、においは呪いフレーザーが加わってる。なんだよ、これ。

何がいけなかったんだ。占い師の御婆の奇妙な予言をもう一度、慎重に思い出してみる。

―― 他の世界の、しかもいつ起こるか分からぬ先々の事柄ゆえ、わしにはその意味がまったく分からぬ。

―― ただ、板切れに空いた小さな隙間に細かな網目があること、

―― おぬしがこの板切れに頬を摺り寄せ網目に向かって愛の言葉をささやくと呪われること、

―― この二つは確かなのじゃ。

板切れ。

これか、携帯電話か?! 板切れってこの、林檎社謹製スマートフォン第4版のことなのか?

御婆、板切れに頬ずりって違うう! 板切れじゃないよ、ぎっしり中にいろいろとちまちま詰まってるから、電子的な何かがいっぱい詰まった精密機器だから! それに板切れに見えないこともないこれに頬ずりしたわけじゃなく、電話かけたただだから!

あああ、確かに愛はささやいちゃったかもしれない、異世界のおばから擦れば板切れに頬ずりしてたみたいに見えたかもしれないよ、小さな隙間の細かな網目に向かってではない、断じて。表の、上の部分にあるこの小さく細い隙間には確かに細かい網目がきらきらしてる。けどこれは耳を当てる部分で、電話するとき音を聞くためのスピーカーだ。ここに愛をささやいてないぞ。大丈夫。じゃあマイクはどこだ。マイク……確か下のほう。

あ、ぜんぜん大丈夫じゃない。よく見たらマイクも同じ形状、小さくて細い隙間、きっちり細かい網目が填まってる。

俺、林檎社スマホという板切れ状の電話に頬を摺り寄せて愛の言葉をささやいちゃったのか。

うわー、御婆の予言、情け容赦なしに正確。

携帯電話からは

「ぎゃー、『愛してる』だって！」

「あの原口くんが……！」

「うぷぷぷ、ウケる」

「はるかちゃん、よかったねー」

などときゃいきゃい音が漏れていたがもうどうでもよかった。ぶつちり通信を遮断した。

とうとう呪われてしまった。

きつく絞まる触手マフラーを緩めようと指をかけるが、うまくいかない。息苦しい。

俺はがっくり膝をついた。

「勇！」

平林が駆け寄ってくる。そしてもう一人分、軽い足音が聞こえる。

「大丈夫か？　どうした、マフラーきつくしすぎなんじゃないか、顔色悪いぞ」

といいながら腰をかがめマフラーを取り去ってくれる。あ、息が楽になった。

「……首に、呪印、ないか？」

「あ？　じゅいん？　勇、何のことだ」

平林を押し退けるように誰かが割って入ってきた。その人も平林と同じように膝をつき、俺を覗き込んでいる。制服のスカートが見えるので女子生徒のようだ。靴が上原のものとは違った。上原ではない。

「上を向いてください」

言われたとおりにする。痛みと息苦しきで視界がぼやけているからか、グラウンドのきつい照明が背後から当たっているからか、彼女の顔は見えない。

「首に違和感があるんですね？」

すうっと細い指がのびてきて俺の喉の、先ほど電撃のような痛みが走ったあたりをなぞる。冷たい指の感触が去ると、不思議なことに痛みが消えていた。

「大丈夫、呪印はありませんよ」

背後の光が強すぎて顔は見えない。でも、オーラが見える。くるりくるり、と渦を巻く黒い粘着質なオーラ。よくよく見ればどす黒いだけでなく、感情の変化を克明に捉えてさまざまな色彩の尾を引く。懐かしい。ちよっとしつこくて嫉妬深いところも確かにあってそれがオーラに反映されていた、ああ、キミなのか。

「何の話か分からんが、それよりも勇、顔色がひどいぞ。親御さんに迎えに来てもらうか？」

平林が割って入った。顔の見えない女子生徒は「失礼しました、私はこれで」とあっさり退いていった。

立ちくらみを警戒してゆっくりと立ち上がり、膝の砂埃を払う。彼女の気配はすでに途絶えていた。

「大丈夫か、勇」

「ああ、なんとか帰れると思う」

「試験で根を詰めすぎたんじゃないのか」

「そうかもしれない。風邪引いたかもな。悪い、上原を見たら先に帰ったと伝えてくれ」

「電話してたんじゃなかったのか？ まあ、いい。ほんとに具合悪そうだな。おだいじに」

転生して幾星霜、俺はどうとう呪われた。

呪い発動の副作用なんだろうか。帰宅後、俺は盛大に発熱しぶっ倒れて寝込んだ。

まぶたの裏を、いつか聖女と見た星々のような、彩り豊かな微かな光がちかちかと瞬き、消え、また過る。

呪われているというのに、俺は幸せな夢を見た。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9857x/>

---

転生勇者とリア充の呪い

2011年11月18日11時37分発行